キュリロスの第四書簡ーネストリオスへの第二の手紙

(1)ある人々は同輩ネストリオス殿の信仰に対する私見を吹聴して回っており、特に司教会議の開催を目論んでいるとのことである

彼らは何とかして貴殿の気を引こうと考えているので、不愉快な発言を入れていることだろう。彼らは自分たちが不正をなしているとは毛頭考えておらず、むしろ当然なすべきことを行っていると確信しているのである。一人は目の不自由な人々や貧しい人々に対して不正をなし、別の一人は母親に刀を振り上げるようなことをなし、さらに別の一人は他人の金を盗み出すために下女と通じたのである

ニカイア公会議(325)

(2)ここでは、私にとって重要なものとなっている事柄に戻り、貴殿に、教えの言葉と、信仰の意図するところを信徒に対して説かねばならないことを思い起こしていただきたい。もし、私どもが、聖なる教父たちの教えに従い、記されていることに即して、「私たちが信仰に生きているかどうか」自分を吟味するなら、私どもの内にある思いを、彼らの見解にぴったりと合わせて形成するということが現実のものとなるだろう

(3)ところで教会会議は、次のように宣言した。すなわち、その本性(フユシス)に即して、父であられる神から生まれた独り子であられる子、この方を通して父がすべてのものを造られた方ご自身が、降って来られ、肉となられ、人間となられ、苦しまれ、三日目に復活され、天に昇られたのである。

私どもは、神から言(ロゴス)が肉となられ、人間となられたとはいかなることか考察するにあたって、これらの言葉とこれらの教え(ドグマ)に従わなければならない。実に私どもが言おうとしているのは、言(ロゴス)の本性(フユシス)が変化して肉となられたということでも、魂と肉体から成る人間全体に変形したということでもない

むしろ、私どもが主張するのは次のことである。すなわち、言(ロゴス)は、一個別者(ヒュポスタシス)として、名状しがたく把握しがたい方法で、理性的な魂に生かされた肉を自分に合一させて、人間となられ、人の子と呼ばれたが、それは単に意志や恵みによることではなく、単に役割(プロソーポン)を受け入れたことによるのでもない

また、真の合一(ヘノーシス)となるような結合された本性(フユシス)はそれぞれ異なるものではあるが、双方から成るひとりのキリスト、ひとりの子がおられるのである

本性(フユシス)の相違は合一(ヘノーシス)によって取り除かれたのではなく、合一のための名状しがたく言語に絶する結束によって、私どものために、神性と人間性とが唯一の主、キリスト、子となったのである

(4)こうして、代々に先立って存在を有しておられ、父から生まれておられたのだが、肉に即して女から生まれたと言われるのである

この方の神性は聖なる処女の内に、その存在の元(アルケー)をもつのではなく、父からの後にそのもののために第二の誕生を必要とされたのでもない

実に、あらゆる代々に先立って存在しておられ、父とともに永遠に存在される方が、存在されるために第二の元(アルケー)を必要とされたと主張するのは、条理を逸したことであるとともに、愚かなことである

しかしながら、「私たちのため、また私たちの救いのために」言(ロゴス)は一個別者(ヒュポスタシス)に即して人間性をご自分に結び合わせ、女から出生されたので、肉による出生が語られるのである

実に、まず初めに、普通の人間が聖なる処女から生まれ、その後、言(ロゴス)がその人間の上に降ったのではない。逆に、ご自分の肉の誕生をご自分のものとされたことで、胎内で合一した言(ロゴス)が肉による誕生を甘受されたと言われるのである

(5)同様に、この方は苦しみを受け、復活されたと私どもは言うが、神の言(ロゴス)が、ご自分の本性(フユシス)において苦しみを受けられたのではない。実に神性は苦しみを受けることはない。非身体的なものだからである

生まれたものである、この方ご自身の肉体が苦しみを受けたので、この方ご自身が私どものためにそれらの苦しみを受けられたと言われるのである

実に、この方は、苦しむ肉体の内にあっても、苦しむことのない方であられたのである

私どもは、この方の死についてもまったく同様に考えている。神のロゴスは、本性に即して、不死の方、朽ちない方、生命であり、生かす方であられる。パウロが言っておるように、神の恵みによって、すべての人のために、その肉体が死を味わったので、この方ご自身が、私どものために死の苦しみを受けられたと言われるのである

本性に関する限り、この方は死を体験されることはなかった。まさしくこの方の肉が死を味わわれたのである。同様に、この方の肉が復活させられたときにも、この方の復活として語られる。しかし、この方が腐敗に屈したと言うのではない。この方の肉体が復活させられたということである

(6)このようにして、私どもは唯一のキリスト、主を表明するのである。私どもは言(ロゴス)とともに一人の人間を礼拝しているとは言わない。私どもは唯一の同じ主を礼拝しているのである。この方の肉体は言(ロゴス)にとって『よそもの』ではなく、それとともにロゴスは父の許に座しておられるのである

しかしながら、ふたりの子が座しているというのではない。固有の肉との合一に即してひとりの方なのである。もし、私どもが「一個別者に即した合一(ヘノーシス)」をありえないこと、あるいは不適当なこととして退けるなら、ふたりの子を語ることになってしまう

その結果必然的に、一個の人間であるが特別に「子」と呼んで敬われる方と、それとは別に、本性的に子としての名前と実質を特別に有しておられる神のロゴスとを区別しなければならなくなる。それゆえにこそ、唯一の主イエス・キリストをふたりの「子」に分けてはならないのである

(7)たとえ、ある人々がもろものの役割(プロソーポン)の合一(ヘノーシス)を認めようとも、これに優る信仰の正しい表明はけっしてないであろう。実際、聖書は、ロゴスは人間のプロソーポンをご自分に結び合わされたとは述べておらず、肉となったと述べているのである

言(ロゴス)が肉(サルクス)になられたということは、血と肉とを具えられたということにほかならない。私どもの肉体をご自分のものとされ、神であられること、父なる神から生まれた方であられることを放棄することなく、肉を受容されても、(かって)存在されたままであり続けられつつ、人間として女から生まれ出られたのである

これが精確な信仰の教えである。聖なる教父たちもそのように考えていたことがわかるであろう。こうして、彼らは聖なる処女を神の母(テオトコス)と呼ぶのをためらわなかったのである

むろんロゴスの本性(フユシス)もしくはその神性が聖なる処女からその存在の元(アルケー)を得たということではなく、理性的な魂に生かされた聖なる肉体(ソーマ)が生まれたという意味で、一個別者(ヒュポスタシス)に即しこの肉体と合一した言(ロゴス)が肉(サルクス)に即して生まれたと言われるのである

以上のことをここに私が記したのはキリストの愛に駆られてのことであり、兄弟として激励し、私どもといっしょに以上の教えを考え、かつ教えていることを、キリストと選ばれた天使たちの前で証言されるよう切に勧めるためである。それもひとへに諸教会間の平和が保たれ、神の祭司たちのあいだの一致と愛の絆が断たれることのないためである

合一(ヘノーシス)が何であるか不明であるし、神は一つであるのに、本性が異なるというのは矛盾する

本性(フユシス)あるいはウーシオスと三つのヒュポスタシスの関係ではなく、本性が異なるものでそれが合一されたとする。合一はキリストにおいて実現されたとするが、合一の前に神とキリストの異なる本性が存在することになる

父とロゴスの本性が異なるとするなら、マルキオン派であるし本性が同一であるとすれば、合一とはサベリオス主義(御父受難説)ではないか

ウーシオス->(ヒュポスタシス)、ヒュポスタシス->(一個別者)と意味の転換を意識的に行っているのではないか

胎内で合一したロゴスが肉による誕生を甘受した、とはキリストの誕生と人生を否定的に捉えるサベリオス主義(御父受難説)ではないのか

人間の苦しみを肉体の苦しみと単純化し、キリストの人間性を無視しているのではないか

キリストを神性と肉体が合一されたヒュポスタシスであるとして、肉体と魂である人間の死からの救いを復活によって示したキリストの意義をないがしろにしている

定義されない合一(ヘノーシス)を言うキュリロスが攻撃された場合には、合一を認めないものはふたりの子を語ることだと、逆に攻撃するための準備である

唐突にテオトコスの正当性を述べている